

あけおめです！ ちょうど一年前の冬インテからジャイキリに参入しました私としては、なんだか懐かしい気もするインテです。今回のペーパーは冬コミで配布したペーパーのSSとお対になつとります。前のはサイトにアップしてありますのでよろしかったら覗きに来てやってくださいませ。今年もセラサク・セラサクと過ぎて行くことを祈って。今年もよろしく願いいたします！

今年一番はじめの日

ジムに併設されているプールは思ったよりも混んでいた。唄はゆっくりとした速度のクロールで、水の中を進む。上半身にあまり筋肉がつかないのも問題だ。トレーナーと相談しながら組んだメニューを淡々とこなすことにのみ心を傾けるようにして泳いでいる。

正月三日。チームは明日から始動する。もうと今日は、毎年恒例で浅草駅にあるテパートでE TUサポーターと初売りの買物客向けに行われるトークショーに呼ばれている連中もいる。今年はキャブテンの村越と五輪代表効果で赤崎、それから主に座を温めるという意味あいで丹波が出演することになっている。去年は唄も呼ばれたが、今年はお呼びがかからずぼつとした。ああいうイベントはひどく苦手だ。

広報からはあくまでも「事前に広報に連絡した上で」飛び入り参加は歓迎すると言われている。もちろん顔を出したら最後、確実にタダ働きさせられる仕組みだ。毎年何人かの若手がサポーターたちに顔を売る目的コミで必ず「飛び入り」するようにと選手内で暗黙の了解ができていて、トークショーに参加する面子から耳打ちの指名がされる伝統になっていた。今年は楢と宮野、それから上田が行くらしい。

世良は。世良は「俺、去年と一昨年行ったんでもうお前じゃサプライズ感ないからいらないうて母さんに言われたっす。戦力外通告食らいました」と苦笑していた。元日の朝のことだ。

大晦日、東京から地方に向かう交通が荒天のために完全ストップしたため、世良は唄の部屋で年明けを迎えた。電車が動き出しているのを確認して、東京駅まで送ってやったのは同じ朝。

別れ際に生意気なキスをされ「3日の午後には戻りますから」とやけに熱のこもった瞳で言われた。とっさに巧い言葉が出てこずに「ああ」と短い返事だけをした。

(世良のくせに……)唄は気持ち泳ぐスピードをあげる。今さらキスのひとつやふたつでとうとうこういう年齢でもない。世良と2人きりで過ごす時間の濃密さを思えば、それこそ、だ。

オーバーワークになるのを覚悟で、また少しスピードをあげる。とにがく身体を動かしていたかった。(生意気だ……)

2日も前のキスの感触がずっと唇の上に残っている。気がつくと唇に手をやっていて、そんな自分にぎょつとした。普段の毎日では、もちろんチームメイトとして毎日顔を合わせているものの、夜を共にするのはせいぜい週に一度

か二度がせいぜいだ。夕食と一緒にとるのも同じくらい。互いに立場のある身の上だけに、そうそう恋人の時間を過ごすことはできない。

別段、自分たちが特別なわけではない。こういう状況は社会人同士ならばごくごく当たり前のことだ。どちらかと言えば、自分たちはかなり違っている方だろうしそこには不満を持っているわけではない。

だが。「……唄さん、ちょっとオーバーペースですね。一回あがって、サウナで身体温めてきてください。それから水中ウォーキングに切り替えましょう」「……はい」

トレーナーが苦笑してプールサイドから声をかけてくる。自覚していたことでもあったから素直に従い、水から上がった。サウナには誰もいない。室内の時計の針はまだ午前10時を回ったばかりだ。

「まだ、こんな時間が……」思ったよりも身体が冷えているようだ。それで少し長めに、湿った熱気に肌を晒して体温が上がっていく感じを楽しむことにする。いつもの正月だった。

唄は毎年大晦日の日に帰省して元日の夜に自宅に戻ることにしている。二日の日は完全休養日で、日課のロードワーク以外は一切身体を動かさずに本を読んだりDVDを観て過ごす。3日の今日はチームの本格始動に備えてジムやプールで軽く身体を動かす。

これはもう例年のことで、なに今年が特別なわけではない。「そうか、まだ午前中だったか……」

なのにとつたわけが、今日も昨日もやけに時間が進むのが遅く思える。休暇の時間を待たず余し気味だ。(やれやれ……)

気がつくと、時計の針が進む音をひとつひとつ数えている。この感覚はとうももの槽れない。結局、プールとサウナの繰り返しで粘って見たものの、今一つ調子が上がらないままあがることにした。

結構時間を潰せたと思っていたのに実際のところはまだようやく正午を過ぎたあたりだ。フロントにロッカーのキーを返しに寄るとちょうど楢と宮野が連れだつてやってきたところだった。「っす！ 唄さん、あけましておめでとうございます！」

「おめでとうございます！」チームが契約しているジムだから、チームメイトたちとはつたり会うことは当然、ある。なのに2人は運悪く鉢合わせしてしまつた先輩選手にぎょつとした様子だ。慌てて頭を下げてくる。

唄は軽く手をあげて応えた。「おう。お前たち、今日トークショーの応援じゃねえの？」

声をかけると、若手2人は困った顔をして「そうなんですよ……」と弱音を吐いた。

「応援って、俺たち何していいかわからなくて……今年、応援チームの方、経験者いないんで。何すればいいんすか？ 有里さんには、いい頃合いで立ち見の人たちの後ろに紛れこめば後はこつちで指示しただ通り動いてくれればいから、って言われて」

楢がげんざりした様子で言った。「年末に世良さんに訊いたら『トークショー来る前に軽くジムで身体あつためてこい』って言うんで一応来てみたんですけど……俺ら、正直それどころじゃないんすけど」

宮野の言葉に唄は苦笑する。「一昨年のことは知らねえけどな、去年は俺がメインゲストの一人だったから覚えてるぞ。若手はお客さんとのゲームコーナーでストップウォッチ代わりに腕立てと腿あげやって盛り上げ役やってたな」

世良は去年、前年の教訓からだろう、比較的動きやすい軽装で準備万端整えてやって来たがためにあえて他の連中の倍のノルマを言い渡されて、真っ赤な顔をしながら必死でスワットをやってた。

思い出して思わず吹き出す。若手2人はそれぞれ大体、自分たちが何のために呼ばれてどう扱われるか悟つたらしくますます垂れて「ストレッチがっちりやってこうか、宮ちゃん……」「上田にも連絡しとこうよ」と諦念の域に入つたらしい。

あの時、自分が世良とどうなるなんてことは考えもつかなかったが、確が石神が煽つて唄が「やれ」と命じ、村越が強いてそういうことになつたのだ。話を聞くと毎年そういう流れらしい。

去年はチームが不甲斐ない成績に終わったせいで、客の入りは今一つだったのだが、世良をはじめとする若手が身体を張つた必死なサポートをしたおかげでそれなりに盛りあがつたことを覚えている。

世良はあの時も一生懸命だった。ゲーム後のサイン会では、かなり多くの人に「がんばってましたねー」「よくやった」と、声をかけてもらっていたようだ。

(今年は多分去年よりずっと人が集まるっのに、残念だったな) たつた2日前別れたばかりの相手の顔が思い浮かぶ。若手2人に「頑張れよ、終わつたらさき焼き食わしてもらえから」と希望を伝えると、駐車場に向かう。運転席に座つてから息を整え携帯をチェックする。

メールは一通も来ていない。「……」エンジンかけると、そのまま新春の街に繰り出した。

ワインとガス入りミネラル、それから水素水を大量に選び、ついでに今日の昼夜の食材を一人分にしてはやら多く買い込んだ。時計を眺める。もう、午後一時をまわっている。「……」

ちりちりと胸の奥が焦げた。メールはまだ一通も届いていない。着信履歴も残っていない。ひどくいらついている。とでも、いらついている。マンションの駐車場に戻つてくるともう一度携帯をチェックした。

やっぱりメールも着信履歴もないままだ。「……遅え」

唄は小さく舌打ちした。どうせ時間はたつぷりある。だらだらと何回かに分けて買いこみすぎた荷物を運ぼうかと、ため息をつきながら車を降りる。

「……？」ふと、気配を感じた。隣に停めてある車のあたりには不審な人影がある。ここの住人なら堂々としているはずだ。こそこそしているのが怪しい。正月早々車上荒らしかと、唄は警戒を強める。

(さつげんな。俺は今、機嫌悪いんだよ！)「誰だ！」「わ！」

誰何の声に驚いて、車の影でこそこそしていた男が悲鳴をあげる。「……世良？」

聞き覚えのある声に、唄は首を傾げる。「何やってんだ？ こんなとこで」世良は決まり悪そうにリュックを背負い両手にいつばいの荷物を抱えたまま物影から現れた。

「……あけおめ、っす。唄さん」「ああ。そんで何やってんだ、お前、こんなとこで」「いやあ……いきなりマンション訊ねて脅かそうと思つたら、いないし……駐車場見たら車ないから出がけたんだなと思って。寮に戻つてる間に帰ってきたらもつたいないな一つて考えたら、そこで張るのが一番効率いいかなって……すんません」

最後は困った顔で頭を下げられた。唄はため息をつくと「お前なあ……俺だつてトレーニング行つたりするんだから来る時は連絡寄こせよ、小学生じゃあるまいし」と呆れる。

「いやあ……ほら、恋愛にサプライズとかがって効果あるつて言うし」「俺が見つけたからいいようなものの、他の住人に見つかつたら問答無用で110番通報だぞ？ わかつてんのか？」

「あ……」言われて悟つたらしく、世良が青ざめる。唄は苦笑した。「しょーもねえのな、お前つて」

「……言葉もないっす」しょぼんとする世良に、唄は微笑する。「罰だ。車ん中のモン、運ぶの手伝え」「っす！」

ばあつと輝くような笑顔に変わった世良は大きく頷いた。「あ、唄さんに土産買ってきました。あと、ウチのお袋からもらってきた漬物あるんです。白菜漬。マジ美味いんで絶対唄さん気に入ると思います。あと、黒豆！」

「わがつたわがつた。とりあえず手伝え」「あと、唄さん……会いたかつたっす」「……るせーよ」

唄は、顔を背けてそう言った。2人で手分けして大量の荷物を運びこむ。それから唄の買いこんで来た一人分にしてはやけに多い惣菜と、世良の土産でランチにした。

気がつくと、あつという間に時間が経っていたことに、唄が気付いたのは夜になつてからだった。悪かつたはずの機嫌はもちろん、とつと昔に直つている。